

古垣光一編

『アジア教育史学の開拓』

アジア教育史学会 二〇一二年・一二刊
A5 七〇八頁 一三五〇〇円

本書は二〇一二年にアジア教育史学会創設二〇周年を記念して刊行されたものである。論文の部と資料の部（東洋教育史学会・アジア教育史学会）の二部構成からなり、さらに論文の部は（1）中国教育史、（2）植民地教育史と独立後の教育史、（3）日本教育史と日中教育交流史、の三つのテーマより構成されている。以下、いくつかの論文を取り上げて本書の概要を紹介する。

論文の部は、三つのテーマで構成されており、その内容は多岐にわたっている。土屋洋は蔣黼著『中国教育史資料』の内容と執筆背景を通し、当該書が東アジアにおける人的・知的交流の産物として生まれたものの、「アジア教育史」を描いたものではなかったことを指摘している。槻木瑞生は満洲に生活基盤を置いた日本人を「国家」と「郷土」の視点から考察し、彼らの郷土意識が日本から満洲へと変容したことを明らかにする。國分麻里は、郷土教育が盛り上がりを見せた一九三〇年に焦点を当て、日本人児童の通う朝鮮の群山公立尋常高等小学校の郷土教育の取り組みを検証する。また山田美香は台湾の感化院の戦後教育、そして日本植民地時代の感化院、少年刑務所と戦後の感化院の比較検証を行う。

ている。赤井ひさ子はインドの初等教育と教員について歴史的経緯と近現代の変化を考察している。そして鈴木正弘は白幡義篤撰『和漢帝王歌』を通して明治期学制公布以前の歴史教育の志向を検証し、文化の伝播や交流史にも配慮している点から、それが単なる帝王に関する暗誦教材ではなく、後世の教科書を比較・検討する上でも非常に有用な書物であると指摘している。

以上のように本書の特徴として、中国・満洲国・朝鮮・台湾・インド・日本というアジアの広汎な地域を扱っている点が挙げられる。また本書の魅力は、それぞれの地域社会に生きた人々がどのように生活を営み、そこでどのように教育が展開されてきたのかを、国という枠組みを超えてアジアの国々のつながりの中で捉えているところにある。

資料の部では（1）思い—先学の記録より、（2）東洋教育史学会の歩み、（3）アジア教育史学会の歩み、（4）東洋教育史学会関係論集内容総覧、（5）『東洋教育史研究』総目次—第一集〜第十二集、（6）『アジア教育史研究』総目次—創刊号〜第二十号、—附、『会報』エッセー—覧、（7）解説に代えて—アジア教育史学の開拓—アジア教育史学会20周年に至る歩み、が収録されている。

この『アジア教育史学の開拓』という書名には「アジア教育史学にはまだまだ未開の原野が横たわっている」という意味が込められているという。二〇周年を経て節目を迎えたアジア教育史学会が、今後も未開の原野を更に、精力的に開拓していくことが期待される。

（若泉もえな）